

要約

キーワード：在日コリアン・女性、チェサ、ハン、エスニック・アイデンティティ、文化変容

本稿では、朝鮮半島の伝統的な儒教的祭祀（以下では、チェサ）を在日コリアンはどのように継承してきたのかを確認しながら、その意味を検討した。調査方法としては、伝統的・規範的なチェサの形式と意味とその変容、在日コリアンの歴史及び伝統的習俗やアイデンティティの変容などに関する文献資料と、チェサの当事者である在日コリアン、とりわけ女性に対するインタビューのデータを中心とした。

調査から浮かび上がってきたのは、チェサの歴史的意義の変化であり、それと表裏一体となったエスニック・アイデンティティの変化である。110年以上になる在日コリアンの歴史の中で、チェサの時空間は血の繋がった祖先と共に過ごす場であり、したがって故郷と繋がった場、また生きている血族が集まる場、集団的アイデンティティを再認識する場、子孫に血筋を確認させる場、さらに儒教的な年功序列や孝の思想や秩序の教育の場であった。

チェサは、朝鮮半島に眠る祖先との紐帯を再確認し、日本社会の差別や偏見に立ち向かう矜持を保ち、在日コミュニティのネットワークを維持する核とも言うべきものであった。

その1世たちとともに生きた経験を持つ2世たちも少なからず1世の影響を強く受け、エスニック・アイデンティティや、チェサに対する儒教的な世界観を内面化してきた。しかしその一方で、日本への適応性や祖国に対する帰属意識が変化するなかで、葬祭に対する日本社会一般の仏教的な世界観を受け入れ、また、日本の地域社会の市民として生活を営む人々も増え、チェサは民族意識の確認の場というより、親族が集まる場に変化してきている。

2世、3世と世代が進んでも、今なお儒教的チェサを継続している人たちは少なくないが、かつての祖霊を崇拜し「孝」を尽くす場というより、亡くなった人の〈いのち〉とともに生きている自分たちを癒すための場へという変化が見られる。現在は在日コリアンの集住地区は減り、「祖国志向」が希薄化する中、日本の葬礼文化や墓参りの影響を受け、仏壇との併祀、花を供えるという変化が生じ、また鬼神や祟りといった霊に対する畏敬の感情は薄れ、祖霊を崇拜し「孝」を尽くすという以上に、親族の集まりの場、自分たちを癒すための場としてチェサを捉えるようになったのである。

1世が退場するなかで、在日コリアンコミュニティの希薄化や日本社会への順化が進み、さらには核家族化、少子化といった社会的環境の変化、家のタテ・ヨコの関係（地縁的・血縁的關係）の希薄化が進み、民族アイデンティティの生産・再生産の場であるチェサの維持・継承も変化している。

1世の時代とは違い、祖霊を招きチェサをしなくてはならないとか、チェサのしきたりを

守って行わなければならないなどと考える人は少なくなった。現在のチェサでは、亡くなった者を追慕し、家族や兄弟が集まる場という意味が重視されている。祖霊のためより自分たちが亡くなった人の〈いのち〉とともに慰めあい、記憶を共有しあえる人々と交流する場と考えるならば、自分たちや孫の好きなものを供え、花を供えても違和感は生じない。人々の霊に対する畏敬の感情は薄れ、自分たちの悲しみ、記憶、交流のための葬儀や法事になってきたと言うのである。

特筆すべきは、女性の意識の変化である。父系親族の秩序と団結の維持を目的とするチェサにおいて、主体は男性であり、女性の役割は祭祀を準備し、祭祀を継承する息子を生子、次世代に継承することであった。儒教的チェサでは女性は男性と同等とはみなされず、その儀礼の場からは外されていた。チェサの供える料理を作りチェサ儀礼を支え、チェサの祭主となる息子を産まなくてはならないという立場は女性たちに肉体的のみならず精神的にも負担を強いていたことが聞き取り調査から読み取ることができた。

1世や1.5世の女性たちは、このチェサの基底をなす家父長的規範と、植民地支配という二重の軛から生じるハン（恨）を抱えることを余儀無くされてきた。ハンは心に積もった深い痛みであり、それを解こうとするエネルギーでもある。特に在日コリアン女性の1世や戦前に生まれた1世半と呼ぶしかない世代、さらに、1世の影響を強く受けた2世などは、儒教的な家父長制度の影響が強い家庭環境で育ち、ハンを抱えていたと考えられる。

女性たちはハンを解くために、またチェサで祀れない「主なき祖先」を慰めるため、本来の儒教理念から外れたチェサを執り行うことで、「主なき祖先」のハンを解くと同時に、自分や家族の日常の幸せを祈願してきた。植民地時代を経験した在日コリアンは、民族名、言葉、文化を奪われるというハンゆえに、民族学校を建設・運営し、民族の言葉を教え、家庭内ではチェサを行うことで、ハンを解こうとしてきたのだが、特に在日コリアンの女性のハンには、より重く胸に積もらざる得ない歴史的背景があった。植民地時代は祖国を取り戻すという大義名分のもとで祖国解放運動が行われる一方で、女性の問題は後回しにされ、民主化運動では民主化のためという名目の下で、女性の平等と権利を要求することさえも許されなかった。在日コリアン社会においても同様で、民族団体の運動も祖国のため、在日の権利獲得のため、民族アイデンティティ獲得のためというヘゲモニーのもとで、その活動を支えて貢献することが最優先され、ジェンダー問題の解決は表に出る機会をもたなかった。

今回の調査では、実際にチェサを支えてきた女性たちが声を出すことによって、簡略化や簡素化が進んだだけでなく、今やその維持・継承の決定を下し、次世代の息子たちにチェサを継がさないという女性も増加していることが分かった。チェサが男尊女卑的性格を有しており、女性にかかる負担が大きく、辛かったからという理由だけではない。日本社会での定住が自明となり、国際結婚も増え、日本国籍者が増えるなど、在日コリアンのアイデンティティは複雑で多様化している。2世は、朝鮮民族への帰属意識が濃厚だった1世に育てられてその影響も強かったが、3世、4世以降の世代は朝鮮民族に自らを一体化するようなアイデンティティを持つ場合は少ない。また、チェサの簡素化や日本化（現地化）が進み、チ

ェサに対する関心も薄れてチェサを取りやめる在日コリアンも少なからずいる。

今や高齢化した2世さえも、少なくない人が、従来のチェサは時代に合わなくなっていることを感じている。儒教的な死生観を持たず、家父長的秩序を受け継ぐつもりもない次世代の在日コリアンに、チェサを今の形のままだに引き継がせることにも疑問、さらには否定的なのである。

そのため、チェサの簡素化や日本化（現地化）が進み、チェサに対する関心も薄れてチェサを取りやめる在日コリアンも少なからずいる。

チェサが男尊女卑的な家父長制を基盤としているうえに、ソニア・リャンが指摘するように、そうした生活史において女性の声自体が聞かれてくることがなかった。それゆえに本稿では、女性の立場からのチェサに対する記憶や認識を聞き取ることが価値あるものであると考え、女性への聞き取りを中心に記録・分析した。チェサを一生懸命に準備し、チェサを継ぐ息子を産み、次の世代に継続させるのが良い嫁であり良い母である、というヘゲモニック的言説を前に、女性の声、生活史は表に出ることがなかった。そうした彼女たちの声を掬い上げ、植民地主義的、男性中心的歴史の叙述だけでは埋められない、在日コリアンの歴史の空白部分を伴う作業の一端を少しでも補ってゆきたい。そして、チェサが今後、どのように変容しながら後続世代に伝承されていくのか、引き続き注視していきたい。